

大学は遠くにありて思うもの—役割を果たさないという役割

武蔵国分寺公園クリニック院長
名郷 直樹
(愛知県9期)



自治医科大学の輝かしい成果

創立50周年と聞いて、それだけでもう十分ではないかという気がする。設立当初は、みんな卒業したら金を返して、へき地には行かないのではないかという意見が多かったとも聞く。そんな予想に反して、卒業生の90%以上が出身県のへき地医療に取り組み義務を果たし、義務年限終了後も70%以上が出身県にとどまって地域医療に貢献しているという現実を聞けば、それ以上に何を望むことがあるだろうか。

そんな輝かしい成果を達成した自治医科大学に対し、出身県にとどまらず、へき地どころか、東京都内で開業している自分に、大学教職員へ向けて何か提言できる資格があるとも思えない。しかし地域にとどまることができなかつた失敗の体験が、その後ろめたさが、多少はお役に立てる提言につながるかもしれない。そんな気持ちで筆を執っている。

へき地を離れ、大学への提言という原稿の依頼に申し訳ない気持ちを感じながらも、やはり母校自治医科大学には、何か特別な思い入れがある。別の大学へ行ったのであれば、どこの大学を卒業しても大して違いのない人生を送っていたような気がするが、現実の私の医師としてのキャリアは、自治医科大学を卒業していなければ決してそうならなかったものだと思える。自治医大卒業生であることは、自分自身にとって他に代えがたいものだ。意識の中では、今も自治医科大学は常に私の中にある。

自治医科大学と卒業生の距離

そんな意識とは裏腹に、現実の自治医科大学と私自身の距離はずいぶん遠くなってしまった。それでも私自身は3年間の後期研修を母校で送ったこともあり、まだまだその距離が近いほうなのかもしれない。多くの卒業生は、卒後一度も自治医科大学では働くことがないだろう。それを考えても、大学との距離が遠いというのは大多数の卒業生にとって共通の思いではないかと思う。特に義務年限内は、都道府県人会の枠組みが中心で、そこに大学の介在する余地は少なく、都道府県職員という身分でもあり、「大学は遠くにありて思うもの」というのが現実ではないか。

ただその「大学は遠くにありて」というように、各都道府県が卒業生医師の人事権を握

り、大学がそこに口出しをしなかったことは、自治医科大学の成功の最も大きな要因の一つだ。この仕組みがどのようにして考えられたものか、とても興味がある。大学の役割は国家試験に合格させるまで、その後は各自治体が責任を持つ。そして、それは見事に実現され、先の大きな成果を生んでいる。自治医科大学は創立以来、医師国家試験合格率の上位を常にキープし、最近では9年連続1位というではないか。この役割は今後も達成し続けてもらいたい。これは今回の提言の一つだ。

しかし、ここで話題にしたいことはこちらではない。国家試験合格後は、卒業生を都道府県に任せるほうの役割だ。この結果が、これまでの高い義務年限の完遂率につながっている。卒業生を手放して自治体に任せたということが、自治医科大学が卒業生に対して果たした最大の役割であったのではないかという逆説である。

「大学は遠きにありて思うもの」、卒業生と大学の距離が遠いことが重要、言い換えれば、大学が卒業生に対して何も役割を果たさないことが成功につながったということだ。50年を経て、この事実は改めて確認されるべきことだと思う。大学教職員への提言は、このスタート視点を明らかにすることなしに始めることはできない。

役割を果たさないという役割

「役割を果たさないことが役割」というのは、私自身がへき地医療の現場で学んだことに他ならない。「壊すくらいなら直すな」と言えばわかりやすいか。卒後2年間の不十分としか言いようのない研修の後、3年目で村内唯一の医療機関に診療所長として赴任した自分自身を振り返るに、余計なことをして迷惑ばかりをかけたというのが現実だ。ただ当時はそういうことさえわからなくらい何もわかってはいなかった。初期研修で学んだ最新の医療をへき地でも提供するのだ、そんな思い上がりのほうがはるかに強かった。

へき地医療が何かも知らず、へき地に赴任して、そこでの医療に色々口を出す、みたいなことは益少なく、むしろ害が多かった。多くの患者に迷惑をかけ、診療所職員にあたり、役場職員ともめ、振り返れば本当に恥ずかしいことばかりである。

へき地診療所勤務中に村長から言われた一言を今になって思い出す。

「先生は診療所で患者を診てくれていればいいんだよ」

この一言に腹を立てていた自分が恥ずかしい。村は医者としてあらゆる意味で未熟な私に対して、診療以外のことを気にしなくていいように配慮してくれていたのである。「診療以外の役割は、私たちに任せていただいて、診療に集中してください」というのは、村民にとっても、私にとってもきわめて合理的な判断であったと、今になってようやくその意味が分かる。

へき地医療という大きな仕事の中の小さい仕事を続けるというとてつもないこと

へき地医療に貢献する、というのはとてつもない大きな仕事である。とても一医師が担うことができるような仕事ではない。ただ反面、多くの人の協力により、医師一人の役割

が小さくても実現できるということでもある。しかし、大きな役割を果たすということに比べて、小さな役割をきちんと果たすというのはかえってむつかしい。そのことのほうが、一人のスーパーマン医師が大きな仕事をするのより、とてつもないことかもしれない。

そのとてつもない仕事を、大学から遠く離れて、出身県に長くとどまってやり続けている、先輩、同級生、後輩の皆さんは、とてつもない人たちである。小さな役割を果たしつつ、多くの人の協力を得て、全体として大きな仕事を成し遂げている。

ここでの仕事を支える原理の一つが「できるだけ役割を果たさない中で果たす役割」ということだ。地域において、そもそも医療の役割は大きくなかったりする。へき地ではなおさらだ。50%以上が高齢者という地域で、一人の医師が頑張っ、80歳、90歳になってもなお早期発見・早期治療なんてことを、地域を挙げて一所懸命やりだすと大変なことになる。それでもそこに小さな問題として健康のことは残る。その小さな問題に関する小さな役割を果たすというむつかしい大きな課題を、目立たず、あまり褒められもせず、ひたすらやり続けるにはどうすればいいのか。そういうことができずに、都市部で開業してしまったのがこの私自身である。

そこで大学がどんな役割を果たしてくれたら、私がさらにへき地で仕事を続けられたか。そんな風に考えてみる。私がへき地の診療所で行き詰って、次の仕事を探していた時、大学からは全く声がかからなかった。しかし、これも今から思えば幸いであった。別にこれは皮肉ではない。ただ、「もう少しへき地で頑張ってみてはどうか。応援するから」みたいな一言があれば、もっと長くへき地の現場にとどまって、今とは全く違った医師としての人生があったかもしれないと思う。とどまるだけではなく、もう少しまともなへき地医療が実現できていたかもしれない。

その後、大学から声がかからなかったことが幸いし、地域医療振興協会から誘っていただき、自治医大卒業生とは別の「へき地医療専門医育成」という仕事に就くことができた。しかし、そこでもうまくいかず、今の自分があるわけで、大学が何もしてくれないからうまくいくことばかりでないのもまた明らかだ。話が振出しに戻る。何もしない中で何をするか、である。

学生に対する大学の役割

大学が何もしない中で何をするか、という問題について、学生、義務年限内卒業生、義務年限後卒業生の3つに分けて、具体的に考えたい。まず学生に対してである。

学生に対しては前述したように、へき地医療はさておき、まず医師国家試験合格である。ここにはもはや外から言うべきことは何もない。本当に素晴らしい取り組みに頭が下がる。

ただ一つだけ言いたいことがある。提言とは違うかもしれないが、自治医科大学のホームページについてである。アクセスすると、真っ先に目につくフレーズが「医師国家試験

9年連続第一位」である。ここはやはり「建学の精神」ではないか。国家試験合格率一位を前面に出す母校というのは、卒業生として、ちょっと恥ずかしい。目的よりも手段を重視しているというのはそもそも変だ。手段は後ろにしまっておくか、当たり前のこととして前面に出さないのがいいと思う。

それはさておき、役割を果たさない中での役割に戻ろう。ここでの提言は、大学にいる人はへき地医療について語らない。語らないことこそが重要な役割である。へき地医療について語るのはへき地の現場にいる人たちだけにしようということだ。

あるいは以下のように言ってほしい。

「へき地医療とは容易なものではない。今現場にいない私が安易に語るようなことではない。現場にいる人たちの話を聞き、現場に行つて研修するほかない。大学にいる私にできることは、へき地医療以外のことだ」

ただ「容易なものではない」というのでは学生は不安になるだけだろう。そこでその容易ならざるものに、卒業生がどう立ち向かっているか、その現実を学生に伝える「へき地医療学」という科目が整備されるべきだと思う。地域医療学の中に、しっかりと「へき地医療学」を位置付けたい。そこでの担当教員は、当然へき地医療の現場にいる人である。

これはそう不思議なことでもない。例えば循環器内科の講義に循環器医療の現場にいない人が出てくることのほうがおかしいと言えれば当然のことだ。「へき地医療」というと誰でも語れるという空気が大学の中にはあるかもしれないが、そうした空気を一掃してほしい。へき地医療の現場にいない人がへき地医療について語るより、いる人が語ったほうがいい。自治医大卒業生にはそうした人材がたくさんいる。その人たちを差し置いてへき地医療を語るなんて、大学の教員たちにそう思わせる人たちである。そんな卒業生の講義を、大学の教職員にも聞いてもらうというのはいいことかもしれない。

義務年限内の卒業生に対する大学の役割

義務年限内の卒業生も一度目のへき地赴任のあと、後期研修をする。現実に行われているのは、卒業生自身の希望に沿った専門研修であることが多い。もちろんそれはそれで重要だ。しかし、自治医大卒業生の後期研修はあくまで2回目のへき地赴任のための研修だというのが大前提である。

私の出身の愛知県では、初期研修中に地元医大の医局に入局し、後期研修はその医局の方針で研修するというシステムになっている。これは1期生2期生が卒業した時点では愛知県にへき地の赴任先が少なく、義務年限内の卒業生のみでへき地のポストが充足される状況であった。そのため後期のへき地赴任ですら、大学医局の人事の中で調整している部分もあり、さらには義務年限後の自治医大卒業生に地域に残ってもらうためには、地元医局に属することが最も合理的な方法で、それは県から指示された方法でもあった。事実これはこれで愛知県の地域医療に貢献するための仕組みとしてこれまでそれなりに機能してきた。しかし、そうはいつても後期研修が個人個人の卒業生のための研修になりがちで、

少なくともへき地医療のための研修にはなっていない。医局人事に基づく以上、県内でへき地医療のための後期研修を行うことは極めて困難な状況だ。

単に自分自身になりたい専門医のための研修ということであれば、それぞれの都道府県で行ったほうが、義務後の定着率にもつながり、いい面が多い。しかし、ことへき地医療のための研修となると、そういう研修ができる都道府県は少ない。これは愛知県に限らず、すべての都道府県に共通する問題である。ここに自治医科大学の大きな役割があると思う。2度目のへき地赴任のためのへき地医療専門研修である。

2度目のへき地赴任のための研修を提供するのは、地元の大学や病院では困難で、現状では自治医科大学が提供するほかないと思う。具体的にどんな研修を提供するかは簡単な問題ではないが、これまでの自治医大卒業生の仕事を集積、整理し、学問的に体系づけ、研修プログラムとして整備するのは、それほど困難なことではないと思う。将来的には地域枠学生の卒後の研修のひな型になるものを自治医科大学が最初に提供できるかもしれない。

私自身の義務年限内の後期研修は、まさに2度目のへき地赴任のための研修として機能した。それは意図していたわけではないが、既存の専門科の研修をしなかったからこそ、結果として2度目のへき地赴任のための研修ができた。ここでも大学から提供されなかったがゆえにできた研修である。内科の研修でもなく、外科の研修でもなく、内視鏡の研修でもなく、エコーの研修でもなく、という中で残された研修が、へき地診療所に戻ることを前提とした研修だったのである。そのうち最も大きなものがEBMというわけだが、これは別に大学で研修しようと思っていたわけではない。誰も提供してくれない中に、へき地医療にとって重要な研修がたまたまあったというだけだ。へき地医療という未分化な領域では、こうした偶然も重要だ。このような偶然が取り込めるプログラムの構築というのは、自治医科大学が取り組むべき、へき地医療教育の大きな課題の一つだと思う。

義務年限後の卒業生に対する大学の役割

へき地勤務を終えた卒業生に対する対応としてよくあるのが、義務年限が終わったら大学に戻ってこい、というものだ。もちろんこれも重要な役割だ。へき地勤務を経験した卒業生が母校に戻って後輩たちを教育する役割を担うことができる。しかし、ここでも「役割を果たさない役割」について考えてみる。

ここでの大学の役割も、大学へ戻ってそのまま栃木に居つくのではなく、再び出身県に戻り、さらにはへき地に長くとどまることができるように、大学は一体何ができるのか、そんな風に考えてみてはどうか、という提案である。できれば自治医科大学には戻らないほうがいい。戻らずに済むために大学は何ができるかを考えてほしい。大学に戻るとしても、もう一度へき地の現場に戻るために、一時的に母校に戻ってはどうか、そんな提案ができるといいのではないかと思うのである。

研修の内容については、各臨床科が考えればよい。ただそれに一つ付け加えて、この研

修は再び地元に戻って医療を提供するためのものであることを明確化するだけである。大学の教員になって残ってもらうのは二の次、というより、残ってもらわないための研修である。

そうすると自治医科大学の教員を誰が担うのか、という問題が生じる。しかしそれはほんの一部の自治医大卒業生と他大学卒業生が担えばいいのではないだろうか。大部分の自治医大卒業生は、義務年限後であっても、また地元に戻るために自治医科大学に来るのが王道というのがいい仕組みだと思う。

これは学生に対するへき地医療の教育をだれが担うのかという問題と重なっている。大学の教員はへき地医療についての教育を担当する必要はない。それは現場に任せればいい。大学の教員にへき地勤務の経験は必要ないとしたほうがうまくいく面があると思う。

中途半端なへき地勤務をして、へき地医療に対してネガティブな意見を吐く自治医大卒業生の教員がもっとも有害である。そうした卒業生の発言を聞くたびに、いっそのこと全くへき地の経験がない教員のほうがいいのではないかという気もする。

最後に

母校自治医科大学について、書き始めたらいろいろ止まらなくなってきた。ここには十分書けなかったが、へき地での研究というもう一つの大きな領域がある。また何かの機会があれば、それについてもまとめてみたいが、次が創立100年での提言だとすると、残念だがとても生きてはられない。でもその創立100年は楽しみな気がする。自治医科大学の役割は今後ますます重要になっていくと思う。それはへき地の現場が少なくなるとしても、多くなるとしても変わらないだろう。さらにはへき地医療の問題がなくなり、自治医科大学がその役割を終え、普通の医科大学になっていれば、それが最高の結末なのかもしれない。そんな様子を天国から眺めることができたらと、さらに50年後を夢想している。